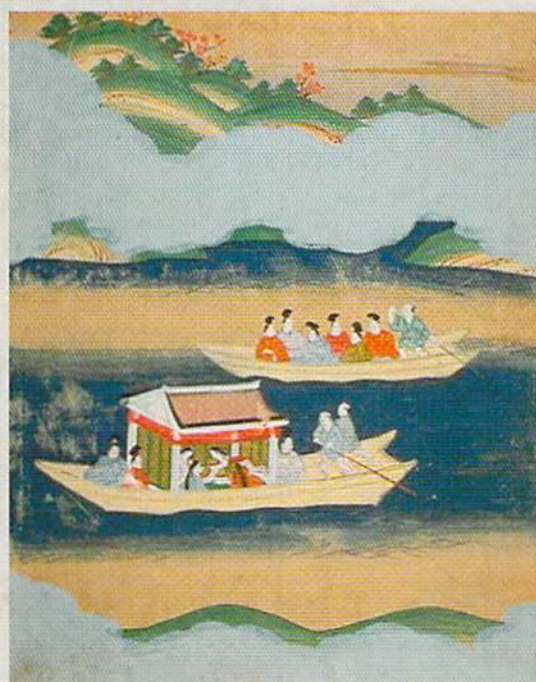


大学共同利用機関法人 人間文化研究機構国文学研究資料館

# 国文研ニュース

No.17  
AUTUMN 2009



『住吉物語』

## 目 次

### ●メッセージ

連携展示「百鬼夜行の世界」 常光、徹 ..... 1

### ●研究ノート

人間文化研究機構シンポジウム「百鬼夜行の世界」 香川雅信 ..... 2

第2回日本古典文学学術賞授賞式 ..... 4

第2回日本古典文学学術選考講評

岡崎真紀子氏『やまとことば表現論－源俊頼へ』 神田龍身 ..... 5

恋田知子氏『仏と女の室町 物語草子論』 小峯和明 ..... 6

「まがよふ」「もごよふ」考―「散木奇歌集」の本文 岡崎真紀子 ..... 7

書物との邂逅―比丘尼御所文芸論をめざして― 恋田知子 ..... 8

「物語の生成と受容」の開催 江戸英雄 ..... 9

### ●トピックス

子ども見学デーの報告 ..... 12

資料紹介 日本文学翻訳コレクション ..... 12

平成22年度アーカイブズカレッジの開催 ..... 13

平成21年度古典籍講習会 ..... 13

第33回国際日本文学研究集会 ..... 13

国文学研究資料館の大学院 ..... 14

表紙絵紹介 ..... 14



## 連携展示「百鬼夜行の世界」



常光 徹  
(国立歴史民俗博物館 副館長)

国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、国立歴史民俗博物館による機構連携展示「百鬼夜行の世界」(7月18日～8月30日)は盛況のうちに終了しました。近年、想像力の文化や精神世界への関心の高まりとともに、その一環として怪異や妖怪文化が注目を集め、学際的な研究が展開されています。人間文化研究機構を構成する三機関では、これまで怪異・妖怪に関する共同研究や異界についての企画展示を開催し、関連する資料の収集を行ってきました。今回の企画は、それぞれの機関が蓄積してきた研究成果や資料をリンクさせ、連携展示というかたちで広く公開するとともに、妖怪文化に関する新たな情報を発信する機会になればとの期待をこめて立ち上げたものです。

本企画が承認され、具体的な取り組みを始めたのは平成20年6月でした。小松和彦氏(日文研)を代表に、小林健二氏(国文研)、常光徹(歴博)が責任者となって、12名からなる展示プロジェクト委員会を組織しました。ただ、21年夏の開催までに残された準備期間は一年余しかありません。今回は怪異・妖怪資料を中心に「百鬼夜行」に焦点をあてて公開することにしました。7月に第1回展示プロジェクト委員会を開いてからは毎月のように議論を重ねてきました。当初は、展示会場である国文研と歴博で開催時期をずらす案などもだされましたが、最終的には連携の趣旨を生かして両館で同時開催とすることに落ち着きました。

器物などが妖怪になった付喪神や鬼など、異形のものたちが列をなして移動するさまを描いたのが百鬼夜行絵巻ですが、

その誕生は謎に満ちています。歴博会場では、通称「真珠庵本」と呼ばれて広く知られている京都・大徳寺真珠庵蔵「百鬼夜行絵巻」(重要文化財)や近年発見されて話題を呼んだ日文研蔵「百鬼ノ図」、江戸時代前期に制作された歴博蔵「百鬼夜行図」など、百鬼夜行絵巻の誕生に深く関わっているとみなされる絵巻の展示に特色を置きました。国文研会場では、百鬼夜行の概念の成立やその系譜を文芸作品を含めて辿るとともに、江戸時代に花開く多彩な百鬼の文化を紹介することに力点を置きました。全体を4つのテーマに分け、第1部「百鬼夜行絵巻」、第2部「百鬼に出会う、避ける」、第3部「百鬼の行列」、第4部「描き継がれた百鬼」から構成しました。展示スペースが広いこともあって、国文研蔵の「今昔物語」や「大黒舞」をはじめとして関連する豊富な資料を展示し、多面的な角度から百鬼の文化を描きました。

また、研究成果にもとづく連携展示の内容を広く伝えたいという狙いもあって、オープンに先立って、7月11日に有楽町朝日ホールで「百鬼夜行の世界」と題したシンポジウムを開催しました。発表者は、展示プロジェクト委員のほか、美術史の立場から京都国立博物館の若杉準治氏に、国文学の立場から学習院女子大学の徳田和夫氏に参加していただきました。本企画は高い関心をよび、受付が始まるやすぐに定員に達するという反響でした。当日は百鬼夜行絵巻の成立や夜行の意味などをめぐって熱い議論が交わされ、会場は熱気に満ちた空気につつまれました。シンポジウムの成果は近く『人間文化 vol.10』

で報告する予定です。

連携展示を推進し成功裏に終了した背景には、立場は違っても怪異・妖怪に関する研究や資料収集などの面で繋がりを確認できる共通の土壌があったことでしょう。しかし、一方では、生い立ちや研究領域の異なる三機関の連携という初めての試みだけに、うまくまとまるのか不安な面があったのも事実です。実際、試行錯誤の連続でしたが、そのつど、お互いに知恵を出し合いながら進めていく過程で、新しい発見があり、連携の輪のなかで創り上げていく展示の魅力に気づいたのは大きな収穫でした。今後、人間文化の学際的・総合的研究の展開を図っていくうえで、個々の機関の研究領域を超えて展開した今回の「百鬼夜行の世界」展は、新たな方向を示す成果といえるでしょう。





## 人間文化研究機構シンポジウム 「百鬼夜行の世界」

香川 雅信（兵庫県立歴史博物館 主査・学芸員）

平成21年7月18日から8月30日まで、人間文化研究機構の国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センターの三つの機関による連携展示「百鬼夜行の世界」が、国立歴史民俗博物館と国文学研究資料館を会場として開催された。この展覧会に先立ち、平成21年7月11日に有楽町朝日ホールでシンポジウムが行われた。本稿はこのシンポジウムに関する報告である。

そもそもの始まりは、「百鬼ノ図」と題された「百鬼夜行絵巻」の発見にあった。「百鬼夜行絵巻」とは、さまざまな異形の姿をした妖怪たちが群れをなして練り歩く様子を描いた絵巻の総称で、京都・大徳寺の真珠庵が所蔵する伝・土佐光信筆「百鬼夜行絵巻」をはじめとして、数多くの模本が伝えられている。国際日本文化研究センターが新たに入手した「百鬼ノ図」は、それまでの「百鬼夜行絵巻」に関する定説をひっくり返すほどの力を秘めていた。そのはかり知れない可能性に気づいたのが国際日本文化研究センターの小松和彦氏である。小松氏は、この絵巻との出会いを機に、それこそ絵巻の妖怪たちにとり憑かれたように、現存する「百鬼夜行絵巻」の諸本を博搜し、その成果を『百鬼夜行絵巻の謎』（集英社新書ヴィジュアル版、平成20年）として世に問うた。この本は、「百鬼夜行絵巻」に関する新たな知見をいくつも盛り込んだ画期的なものであったが、そこでの議論を、実物資料によって多くの人々により具体的に、わかりやすく示そうとしたものが、今回の連携展示「百鬼夜行の世界」であった。基準資料となる「百鬼夜行絵巻」の諸本が一堂に会したこの展示は、通

覧することによって諸本のあいだの比較検討がおのずと可能になるというもので、きわめて学術性の高い展示でありながら、一般の人々にもわかりやすく、なおかつ見て面白いという稀有な展示となった。

シンポジウムでは、この企画の中心人物である小松氏が、まず基調講演として「百鬼夜行絵巻」研究の新しい可能性についていくつかの問題提起を行った。そのうちの最も大きなものは、真珠庵が所蔵する重要文化財「百鬼夜行絵巻」——いわゆる「真珠庵本」を中心に据えて「百鬼夜行絵巻」について考えることをひとまずやめるべきではないか、というものだった。もちろん、この主張がなされた背景には、小松氏の研究の出発点となった「百鬼ノ図」の発見が大きくかかわっている。

「真珠庵本」に描かれた「百鬼」は、主に道具が化した妖怪——「付喪神<sup>つくもがみ</sup>」と呼び習わされるもののけたちであった。現存する「百鬼夜行絵巻」には、「真珠庵本」の系統のものが最も多く、また「真珠庵本」が作品として最も優れたものであったため、「百鬼夜行絵巻」といえば「道具の妖怪たちの行列を描いた絵」という認識が、研究者たちのあいだに刷り込まれていた。ところが、今回発見された「百鬼ノ図」に描かれた「百鬼」は、大半が動物の妖怪だったのである。

実は、「百鬼ノ図」の絵柄自体は、珍しいものでも何でもなかった。現存する「百鬼夜行絵巻」のなかには、「真珠庵本」の絵柄と「百鬼ノ図」の絵柄が混合したものがいくつかあるのである。つまり、「百鬼ノ図」は、絵柄だけならずすでに知られていたのだ。だが、「真珠庵本」の絵柄と合成して描かれ

ていたことで、「動物の妖怪」はあくまで二次的なもの、例外的なものとして扱われ、重要な意味を持つとは見なされなかったのである。

「百鬼ノ図」の発見は、そうした思い込みを払拭させるものであった。「百鬼ノ図」は、確かに絵柄自体はすでに知られていたものである。しかし、そこには「真珠庵本」の妖怪たちは登場しない。さらに、「百鬼ノ図」は「真珠庵本」に次ぐ古さを持った「百鬼夜行絵巻」であり、その祖本は室町時代にまでさかのぼる可能性がある、と鑑定されたことで、「百鬼ノ図」の絵柄の重要性は俄然として高まったのである。

小松氏は、「動物の妖怪」が描かれた「百鬼ノ図」を、中世的な「異類物絵巻」の系譜のなかに位置づけ、さらに「擬人化」という視点から、日本の戯画の系譜のなかに位置づけた。これによって、それまで日本の絵物語の系譜のなかで特異な位置を占めてきた「百鬼夜行絵巻」を、ようやく大きな絵画史の流れのなかに置いて見ることが可能になったのである。これはまさに「コロンブスの卵」で、気づいてしまえば何だそうかという感じだが、今までの「百鬼夜行絵巻」研究は、「真珠庵本」を中心にして行われてきたために、そうしたことが見えなくなっていたのである。小松氏が、「真珠庵本」を中心に据えた「百鬼夜行絵巻」研究をひとまず脇に置くべきだと主張するのは、そのためであった。

さて、シンポジウムでは、こうした小松氏の問題提起を受けて、三名の研究者が報告を行った。まず、京都国立博物館の若杉準治氏は、「異形異類」と「行列」を主題としたさまざまな絵画を紹介し、それらの系譜のなかに「百鬼夜行絵巻」を位置づけることを試みた。また、学習院女子大学の徳田和夫氏は、若杉氏と同様、「百鬼夜行絵巻」が「行列」を描いた絵画であるという点に注目し、「百鬼夜行絵巻」の物語



性を復元しようと試みた。若杉氏、徳田氏ともに、「行列」という表現形式を、物語性を帯びたものとして捉えていたことは興味深い。とりわけ徳田氏が、「真珠庵本」系の「百鬼夜行絵巻」が、本来は屋内から屋外へと展開するように描かれたものではなかったかと指摘したことは注目に値しよう。

筆者が特に興味深く拝聴したのは、国際日本文化研究センターの山田奨治氏の報告であった。山田氏は、情報学という「科学」の立場から、「百鬼夜行絵巻」の図像配列に着目することで、「百鬼夜行絵巻」諸本の系譜関係についての新たな仮説を提示したのである。

山田氏は、情報学の編集距離と系統樹の考え方を、「百鬼夜行絵巻」諸本の系譜関係の分析に応用した。ある絵巻の図像配列が、挿入・削除・移動などの編集操作を一回加えることによって別のある絵巻の図像配列と同じものになる場合、これら二つの絵巻の編集距離を1とする。こうして各伝本のあいだの編集距離を割り出したうえで、各伝本の編集距離の合計が最小になるように描き出された系統樹こそが、最も自然な形の系統樹であるという。

この考え方に基づいて、「百鬼夜行絵巻」のうち「真珠庵本」の系統に属する各伝本の系統樹を描き出すと、実に驚くべき結果が出た。何と「真珠庵本」よりも、国際日本文化研究センターが所蔵する「真珠庵本」系統の絵巻（「日文研B本」と称する）の図像配列の方が、よりオリジナルに近いということが判明したのである（あくまで、図像配列が、ということであって、作品の年代が古いということではない）。そこで改めて、「真珠庵本」と「日文研B本」とを比較してみた時、「真珠庵本」の料紙の順序を入れ替えれば、ちょうど「日文研B本」と同じ図像配列になることから、「真珠庵本」に錯簡がある可能性があるのではないか、と山田氏は指摘する。

こうした情報学による絵巻の分析に「科学で芸術は割り切れない」などというレベルの低い意見が現れないことを願う。山田氏の分析は十分に説得的であり、検証すべき価値のあるものと思われる。

三名の方々の報告ののち、休憩をはさんで、私、兵庫県立歴史博物館の香川と国文学研究資料館の小林健二氏から、基調講演と報告に対するコメントがあった。私は「百鬼ノ図」の発見の経緯（「百鬼ノ図」は最初、私の元に持ち込まれたものであった）と、「百鬼夜行絵巻」の近世における意味づけについて語った。小林氏は、田楽をはじめとする中世的芸能と「百鬼夜行絵巻」との関係について述べた。

コメントの終了後、引き続き国立歴史民俗博物館の常光徹氏が司会となつて、報告者全員によるパネルディスカッションが行われた。その席上での一致した見解は、やはり「真珠庵本」の呪縛からの脱却、ということだった。なかでも若杉氏から、「真珠庵本」は使用された顔料などから見て、もう少し年代を新しく捉えなおした方がよいかも知れない、との意見が出たことはきわめて刺激的であった。今後は、そうした側面からの再検討も必要になってくるであろう。

なお、今回のシンポジウムにおける講演、報告の主な論調は、「百鬼夜行絵巻」を中世的な物語世界のなかに位置づけるということを主眼にしていたが、私個人としては、「百鬼夜行絵巻」のむしろ近世的展開の方に関心がある。「百鬼夜行絵巻」を生み出したのは確かに中世の物語世界だったが、現存する伝本の多くが描かれ、享受されたのは近世に入ってからのことだったのだ。近世は、妖怪が畏怖の対象から娯楽の対象へと変質していった時代である。「百鬼夜行絵巻」は、まさに見て楽しむ「戯画」として近世の人々に受容されていたのだと考えることがで

きるのである。

その意味で、小松氏が提起したもう一つの視点、「百鬼夜行絵巻」を日本の戯画の系譜のなかで考えるということ、さらに掘り下げてみる必要があるかも知れない。例えば、私の勤務先である兵庫県立歴史博物館には、日文研の「百鬼ノ図」と「真珠庵本」の絵柄を合成させた「百鬼夜行絵巻」が所蔵されているが、その巻末には「鳥羽僧正戯墨」と記されているのだ。もちろん信ずるに値しないが、近世において「百鬼夜行絵巻」が戯画として享受されていたことを示唆するものだといえよう。

今回の「百鬼夜行絵巻」の連携展示とシンポジウムは、近年の妖怪に関する研究の高まりと、それに伴う新資料の発掘が可能にしたものである。今後はこれが契機となって、さらに新しい資料がわれわれの前に出現するかも知れない。それによって、あるいは今回提起された仮説がまた覆る可能性もあるだろう。だが、歴史的な資料を相手にする研究は常にそうした可能性を孕んでいるわけであるし、だからこそ今回の「百鬼ノ図」の発見がそうであったように—そのような研究は魅惑的で、知的興奮に満ち溢れているのである。





## 第2回日本古典文学学術賞授賞式

### 日本古典文学学術賞について

平成21年7月23日(木)にパレスホテル立川(立川市)において、第2回日本古典文学学術賞授賞式及び記念パーティーが開催されました。

日本古典文学学術賞は、財団法人日本古典文学会が主催していた日本古典文学会賞を継承し、若手日本古典文学等研究者の奨励、援助を目的として、当館賛助会に設置しています。

授賞式では、日本古典文学学術賞選考委員会の渡部泰明委員長により、今回の受賞者として岡崎真紀子氏(静岡大学文学部准教授)・恋田知子(国際仏教学大学院大学学術フロンティア研究員)の2名を選考するまでの経緯が報告された。

また、受賞の対象となった岡崎氏の著書『やまとことば表現論－源俊賴へ』について選考委員会を代表して神田龍身委員の講評、恋田氏の著書『仏と女の室町－物語草子論』について同じく小峯和明委員の講評がありました。次ページから講評を掲載します。

### 「日本古典文学学術賞」選考要綱

#### 1 趣 旨

日本古典文学学術賞は、日本古典文学会賞を継承し、若手日本古典文学等研究者の奨励、援助を目的とする。

#### 2 賞の名称

日本古典文学学術賞

#### 3 主 催

国文学研究資料館賛助会

#### 4 選 考

国文学研究資料館賛助会に選考委員会を置き選考する。

#### 5 選考委員

旧日本古典文学会賞選考委員	2名
関連諸学会から推薦された委員	5名
国文学研究資料館賛助会運営委員会 委員長	1名
国文学研究資料館教員	1名
日本古典文学学術賞選考委員会が必要と認めた委員	若干名

#### 6 選考委員の任期

2年とする(再任も可)。

#### 7 対象者

40歳未満の若手研究者 3名以内

#### 8 対象とする業績

前年の1月から12月までに公表された、日本古典文学に関する論文又は著書

#### 9 選考方法

選考委員からの推薦及び過去の受賞者(日本古典文学会賞)からの推薦による対象者の論文を選考委員会で審議。自薦は受け付けない。

#### 10 発表時期

6月中旬(第1回は8月)

#### 11 発表方法

国文学研究資料館ニュース及びホームページ等にて公表

#### 12 授賞式

6月下旬(第1回は8月)

#### 13 賞・賞金

賞状と賞金20万円





## 第2回日本古典文学学術賞選考講評

岡崎真紀子氏

## 『やまとことば表現論—源俊賴へ』

神田 龍身（学習院大学文学部 教授）

岡崎真紀子氏『やまとことば表現論—源俊賴へ』（平成20年12月、笠間書院）は、院政期の歌人源俊賴の言語活動全般を扱った本であり、五部十二章から構成されている。第I部「古歌の享受と再生」では、『俊賴髓腦』の引用歌が書物からでなく、記憶という音声言語レベルでの引用であるとし（第一章）、また俊賴が『古今集』の雑歌七首を七叟尚齒会の歌と解釈している点から、『古今集』に新たな意味を付与する俊賴の本文解釈の方法について述べる（第二章）。第II部「物語の受容と展開」は、俊賴の活動を物語等の他ジャンルとの関係のなかで把握したもので、『俊賴髓腦』や俊賴歌の王昭君説話の受容の実態は、皇帝・王昭君各々の心情に焦点をあてており、それは和語の特徴を生かしたものだとし、さらには王昭君の文学史をも試みる（第三章）。また俊賴の『源氏物語』享受は、須磨・明石巻のような例外もあるが、物語内容よりも和語の素材とすべく文脈から切り離れた断片的な言葉への興味であることをいい、同時代の源氏享受の在り様との位相差を指摘（第四章）、また同時代の源氏享受の一般を検討した論も収める（第五章）。第III部「和歌の言語領域」は、『散木和歌集』俊賴歌の表現論であり、その掛詞の用法から、言葉の「音」を媒介に歌語の新たな展開を模索する方法を摘出し（第六章）、漢語・仏教語の字音語を摂取しながら俊賴がいかに新たな歌語を造語しているかを論じる（第七章）。そして「やはらく」という和語を起点にして、梵語／漢語／和語、をめぐる和歌と仏教思想との批評史論の可能性を模索する（第八章）。第IV部「仏教と詠歌の相関」は、仏教と俊賴歌との関わりを扱い、経文から逸脱し、仏

教に託す自己の心情を述べることに重点をおいた『散木奇歌集』法文歌の和歌史的先駆性と独自性をいい（第九章）、さらに仏典の注疏による解釈や、論議・説教での仏教解釈がその詠法に影響をあたえているとして、法会の場合と和歌・歌学の場合との相互交流からなる表現論を試みる（第十章）。第V部「説話の言語空間」では説話と歌学の間を説く。『俊賴髓腦』の記述や『散木奇歌集』の歌の背後に漢詩文や仏典の故事に起源をもつ説話があることから、学問注釈の場合や法会での口頭語が歌学の言説に流れこんでいる旨を指摘し（第十一章）、さらに俊賴文学における説話生成の方法と、それをも許容する俊賴歌学の特徴を論じる（第十二章）。

本書は、俊賴が藤原公任に代表されるようなスタンダードな和歌を超え、和歌言葉の世界に閉塞することなく、和歌の言葉と、仏教・説話の言説、漢語・万葉語等とをダイナミックに交流させるという、その言語論的実験の有り様をたどった労作である。それは単に和歌史研究のみならず院政期の言語と文学を脱領域的に論じたものとして、さらには中世和歌史・文学史への展望をもつ射程の長い論として評価される。またいわゆる注釈的研究としても多くの新見が盛り込まれている。以上の意味において、岡崎氏の仕事が今年度の日本古典文学学術賞にふさわしいとの結論を審査委員会にて得た。席上委員の賞賛の言葉以外にも、したがって以上で講評を終りにしてもよいが、最後に私・神田の意見を若干述べさせていただく。

一つは、本書で何十回となく繰り返される「和語」という鍵語の問題である。岡崎氏自身もいうように、字音語としての漢語利用はともかく、漢語は訓読・翻訳されること



で、和語の世界の隅々にまで浸透している。これは俊賴の文学のみならず『古今集』時代からのことである。となると、和語なる実体は空虚であり、それがア・プリオリにあるかのような本書の論述スタイルには問題があるのではないのか。確かに俊賴の営みは、和語への強烈な批評意識のもとに根拠づけられているのは明らかだが、その意味を分析的に捉える必要がある。和語はそれ自体としてあるのではない以上、和語を装ったフィクションとしての言語使用という戦略的方法がここにみえてくる。またそれと関わるが、口頭語と書記言語との関係論も気になる。俊賴の仮名テキストを支える前提として、語りの場や口頭語というパロールの世界を実体的に指定したうえで氏は立論するが、紙上の音声としての仮名は音声自体でなく視覚メディアであり、フィクションとしての音声以外でなく、また仮に語りの現場なるものがあるとして、その現場の音声は文字を媒介にした音声でしかない以上、そこで現象する音声は書記言語の時代ゆえに渴望された幻想の音声ではないのか。そしてこのようなレベルから、俊賴が伝統的な和歌言語の外へと脱出せんとした欲望のなんかつたるかを説明できるのではないのか。この時代において、純粋なパロールは存在せず、パロールとエクリチュールとの関係域は重層化しており、そのあたりを弁別的に論ずることで、院政期文学のさらなる側面が見えてくると思われる。ともあれ、本書はきわめて普遍的にして挑発的な文学研究の書たり得ており、氏のさらなる学問的発展を祈念してこの講評をとじることとする。



## 第2回日本古典文学学術賞選考講評

恋田知子氏

## 『仏と女の室町 物語草子論』

小峯 和明（立教大学文学部 教授）

恋田知子氏の当該年度の受賞対象の業績は、単著の論文集『仏と女の室町 物語草子論』（笠間書院 2008年2月刊行）である。本書は論考篇三部十三章からなり、これに資料篇として五点の新出資料の紹介、翻刻が添えられる。全体で五百頁の規模に及ぶ力作である。まず第一部「物語草子と女性」では、お伽草子の物語を中心に主人公を救済する役割を持つ尼御前の存在に着目し、媒介者としての意義をとらえ、さらに法華経直談の世界にも通底する諸相を取り出し関連づけている。結章の比丘尼御所の論とも呼応し、中世文学・文化における女人の論として鮮明な問題提起がなされる。以下、お伽草子『まんじゅのまへ』における「万寿」の称号のひろがりや「中山」という場における唱導活動などにふれ、これをうけて『唐糸草子』論では、近世地誌類の丹念な資料発掘をもとに唐糸受難伝承から万寿芸能成功譚、孝行譚への展開を説き、お伽草子中心のテキスト論を相対化する。

第二部「談義・唱導と物語草子の生成」は、談義や唱導と物語草子の生成展開の相を具体的に追究し、まず真宗系の談義本『慈巧上人極楽往生問答』の諸本探索をふまえ、問答体のスタイルに着目、そこで語られる例証説話を検証し、法華経注釈との連関をもとに、公家社会の物語草子制作の現場につらねていく。ついで絵巻の絵解きで有名な道成寺縁起を取り上げ、室町期の道成寺説話の派生や波及の諸相にふれ、女人の執心のモチーフをはじめ多様な物語変容や再創造の動態を法華経直談との関連をふまえて論じ、従前の絵巻中心の研究を多面的な角度から反転させ、相対化している。また、

岩瀬文庫蔵『釈迦并観音縁起』を中心に偽経と物語草子の関連に及び、特に偽経の『観音浄土本縁経』にもとづく早離・速離説話の唱導や注釈世界でのひろがりや縁起絵巻の制作、伝来にふれる。そして『西国巡礼縁起』を対象に冥界譚などを手掛かりに諸本の位相をとらえ、女人救済の文脈を読み解いている。

第三部「寺院文化圏と貴族文化圏の交流」では、お伽草子『はろはろの草子』をもとに教義問答の宗論文芸という範疇を括りだし、女人教導と絵画化による宗教言談の場と物語草子の生成・享受の場とのかさを指摘する。これについて『幻草打画』の物語草子と後の『一休骸骨』につらなる骸骨図の絵解きを解析し、説法・法談と寺院におけるヲコ絵とのかかわりや道歌の意義などを検証し、女人向けの仮名法語の物語絵という位置を明らかにする。ついで足利義満側室らの熊野参詣記録『熊野詣日記』から女人と巡礼と縁起・霊験説話の問題を取り上げ、比丘尼御所の信仰や文芸享受とのかかわりを強調する。また『源氏供養草子』論では、源氏供養をもとにした物語草子をめぐり、新出の歴博本を中心に寺院文化圏と貴族文化圏の交差を説く。これを受けて終章では比丘尼御所に注目し、その文芸・文化の様相を具体的に考察、『洛中洛外図屏風』から尼寺の様相を分析、古記録類から寺社縁起や僧伝など物語絵の制作や享受の文芸サロンとしての比丘尼御所の意義をとらえ、具体例に慈受院蔵『大織冠絵巻』を取り上げる。

以上から恋田氏の論は、近年の中世文学研究のなかでも研究が活発化している物語草子や絵巻、経典注釈、法華経直談、説法・法談、縁起や巡礼記、絵



解き等々の研究状況を的確に把握し、徹底した文献博捜と地道な伝本探索をふまえた、領域横断的な問題の抽出と展開に優れた力量を示している。とりわけこれらの問題群が有機的に関連し、輻輳し競合し共鳴しあう現場として、いまだ仮説的ではあるが比丘尼御所の存在を浮き彫りにした点、おおいに評価される。特に宗教と文芸の相互作用における仮名書きや草子の絵画化の問題と女人の位置や役割を接続させる論も注目に値し、この方面の研究の進展におおきく寄与している。今まで充分解明されていなかった文芸・文化の創造、媒介、享受などの一連の運動体の担い手としての女人の意義を総合的かつ多面的に定位し、貴族世界や寺院世界の交差、交錯する位地に特化し、あらたな研究の地平を開拓している。文化圏という用語の曖昧さをはじめ、細部の問題の追究の浅さなど荒削りな面を一部に残してはいるものの、中世文学を中心とする分野はもとより、従来のジェンダー文化論をより踏み越えて、今後さらにひろく問題が発展する可能性に満ちていると判断される。よって、本選考委員会は、恋田氏の業績を古典文学学術賞に値するものと認めるものである。



# 「まがよふ」「もごよふ」考 —『散木奇歌集』の本文

岡崎 真紀子（静岡大学人文学部 准教授）

源俊頼の『散木奇歌集』を読んでいると、俊頼以外の和歌にはほとんど見られない言葉に遭遇することが少なくない。用例が稀な語彙を含む歌というのは、どのように解釈すればよいのか頭を悩ませるものだ。たとえば、次の歌はその一例である（引用は阿波本による）。

あさましやあはれうきを忍びつな  
とまがよふわが身なるらん

「恨躬恥運雑歌百首」のなかの一首。歌意は、あきれたことだ、憂き世を忍び暮らしつつ、物の紛れに埋もれてきたような我が身なのか…、くらいに解釈できるだろうか。「まがよふ」は、「紛」のマガに「いさよふ」「ただよふ」などのヨフ（動揺・揺動する意、岩波古語辞典）がついた動詞。新編国歌大観で調べると、『風情集』、『山家集』、『拾玉集』などに語例が散見するものの、『散木奇歌集』より時代が遡る歌では、「散るがうへに散りもまがよふ桜花かくしてこそは春も過ぎしか」（貫之集）のみにとどまる。したがって俊頼の歌は、世に認められず不遇に終わった自身を嘆く心情を、我が身が「まがよふ」という言葉選びで詠んだところに独自性が認められる、とひとまずは位置づけられるだろう。

しかし、この歌をどう読むことができるかという問題は、これだけでは終わらないのだ。というのも、『散木奇歌集』の伝本に、次のような本文の異同があるからである。

あさましやあはれうきをしのびつな  
にともごよふわが身なるらん

冷泉家時雨亭文庫蔵本の本文を、濁点のみ補った表記で掲げた。「まがよふ」の部分、冷泉家本には「もごよふ」とある。『散木奇歌集』の主な諸本を見てみると（原本もしくは『阿波本散木奇歌集本文校異篇』の校異を参照）、「もごよふ」は

冷泉家本以外には伝えられていない。近世以後の写本がほとんどである『散木奇歌集』の伝本にあって、冷泉家本は書写年代が群を抜いて古い。そのうえ、本文においてきわめて特異な特徴を示しており、注目される（冷泉家時雨亭叢書解題）。他の流布本と冷泉家本の違いは、歌数の異なりや、詞書の文において特に顕著に現れるのだが、時としてこのように、『散木奇歌集』に特徴的に現れる語彙において、冷泉家本のみが孤立した本文を伝えている場合もある。

「もごよふ」は、「透蛇 毛古与不」（御巫本日本書紀私記）とあるように、身をくねらせて動く・這いずるの意。冷泉家本の本文でゆくと、「あさましや」の歌は、あきれたことだ、憂き世を忍び暮らしつつ、這いずるように生きてきた我が身なのか…、といった意と解釈できる。我が身を物の紛れに埋没してきたものととらえる「まがよふ」の場合と違って、不遇の身で世を渡るさまを、地べたを這いずるという身体イメージでとらえたところに眼目がある歌だと位置づけられよう。ひとつの言葉の本文異同によって、一首の歌のイメージは、かくも変容する。

ただ、さらに気になることがある。「もごよふ」は、「流離（サスラ）へ展転て（モゴヨヒユキメグリテ）」（大唐西域記長寛点巻三）などとあるように、もっぱら漢文訓読の文献に現れる語彙だということだ。例外的に、『源氏物語』葵巻に「かかる齡の末に、若く盛りの子におくれ奉りて、もごよふこと」とあるが、これは、葵の上を喪って悲しみにくれる左大臣（すなわち男性）が語る言葉を表した会話文である。「漢文訓読語・男性語であって、左大臣の動転が的確に表現されている」（源氏物語の鑑賞と基礎知識）という指摘は従うべきものだろう。和歌における例に至っては、俊頼の歌以外には確認できない。



『古今集』以後の和歌において、漢文訓読的な句いの強い言葉は、基本的には用いられないものであった。平安朝において、和歌や物語といった仮名による言葉の世界と、漢籍・仏典の読解をむねとする漢文訓読の言葉の世界との間には、位相の異なりがあったということは日本語学の諸研究によって明らかにされている。したがって、冷泉家本のみには伝わる「もごよふ」は、何らかの誤脱によって生じた本文だと退ける考えも成り立つかもしれない。しかしそうではなく、俊頼は、当時和歌にはあまり用いないものと意識されていたような語を敢えて和歌に持ち込んでみたのだ、と考えてみることはできないだろうか。たとえば、「寄酒恋」題で詠んだ俊頼の歌に、「世の人とはひしたむともすまざらばみきとないひそしほらさじ」（散木奇歌集）がある。おそらく「醺酒」（詩経・小雅「伐木」）に拠るのだろう。「したむ」は、「澆」「醺」などの訓として、『新撰字鏡』『色葉字類抄』『類聚名義抄』に掲出するが、やはり和歌や物語にはほとんど現れない語彙である（築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』）。

俊頼が著した歌学書『俊頼髓脳』には、詠作にのぞむ意識を「いかにしてかは末の世の人のめづらしきさまにとりなすべき」と説いた部分がある。俊頼にとって「めづらしきさま」を求める最も手っ取り早い術は、それまでの和歌には無いような珍しい言葉を使って歌をつくりあげてみることだったようだ。「まがよふ」「もごよふ」二通りの本文を伝える『散木奇歌集』の一首は、和歌の言葉を押し広げようとした歌人源俊頼の視界に、思いのほか幅広い位相の言葉が入っていたことをものがたっている。



## 書物との邂逅 —比丘尼御所文芸論をめざして—

恋田 知子（国際仏教学大学院大学 学術フロンティア研究員）

何気なく目にした書物の内容や背景を探るうち、中世の豊饒にして深遠なる世界をさまよい、思いも及ばなかった結論へと導かれることがある。拙著『仏と女の室町物語草子論』は、そのような偶然がいくつも重なりあったことによって、一書たりえたように思う。

浄土真宗の談義本の一伝本、尊経閣文庫蔵『慈巧上人極楽往生問答』とめぐり会い、その内容を精査していくうち、本奥書の「鳴滝殿」という記述から、後崇光院と交流のあった比丘尼御所の存在が浮上してきた。尊経閣本は、他伝本とは異なり、女人教導の意図が濃厚で、物語性豊かな仮名書きのテキストである点に特徴がある。それは、後崇光院の物語絵巻の制作・享受の動向を背景に、伏見宮家周辺の女人たちが集う比丘尼御所「鳴滝殿」での信仰生活と絵巻文化の中で求められたことによるものと考えられる。

室町期の比丘尼御所の尼の様相は、当代の比丘尼御所の尼たちによる熊野参詣の記録『熊野詣日記』からも窺い知れる。熊野詣の信仰や風俗の実態だけでなく、女性の参詣にかなった霊験談話をも語る仮名の参詣記である点から、一種の説話集として享受する意識が窺え、それは伏見宮文化圏および比丘尼御所という場における、寺社縁起や僧侶などの宗教的言説を絵巻として制作・享受する志向性と通底するものがある。

そもそも、従来の中世文学研究において、尼僧の関与といえば、熊野比丘尼のように、素材としての物語の語り手を扱うことが多かった。だがその一方で、中世後期に天皇家や貴族、将軍家の女性が入寺し、宮中や貴族社会と密接に関わりながら信仰生活を送った比丘尼御所の尼も看過できない。物語草子やその周辺にある書物、古記録類を丹念に追っていくと、語り手としての尼とは異なる、草子の享受者、所持者、

制作要請者としての比丘尼御所の尼の姿が浮かび上がってくる。かくして、室町の宗教文化の中で、宮中や公家の文芸活動と密接なかわりを持ち続けた比丘尼御所は、物語草子の生成・享受の主要な場のひとつであり、当時の文芸文化の極めて重要な拠点であったとする“比丘尼御所文芸論”を提唱するに至った。

しかしながら、古記録の記事と現存尼門跡寺院の蔵書とは必ずしも一致せず、“比丘尼御所文芸論”の構築に向けては、室町期から近世初期の各尼寺の性格をふまえつつ、調査の裾野を広げ、事例を積み重ねる必要がある。そうした考えを強く抱くに至ったのも、やはり偶然目にした、ある書物群によるものであった。近衛家ゆかりの陽明文庫に伝存する「道書類」と称される書物群である<sup>\*1</sup>。

長い間その存在さえ定かでなかった幻のお伽草子『幻中草打画』について、伝本を博搜していた際、ふとしたことから、そこに抄出本である『幻中草抄』を見だし、これまで顧みられることのなかった「道書類」という未知なる書物群の分析に着手した。仮名法語を中心に、計十八種の書物が一括して収められており、慶長・元和年間の奥書を有するものが含まれることや、特に書写期の異なるものも見えないことなどから、同時期に書写された写本群と推察される。ただし、それらが「道書類」として一括された時期については判然としない。

そこには、天台真盛宗の開祖真盛に関わる孤本『雲居月双紙』や四十八巻伝の抄出本『法然上人念仏教化詞』、夢窓疎石の『二十三問答』や二巻本系『宝物集』の端本など、浄土系や禅宗系の仮名法語が収められ、その多くが道歌を多用する点に特徴がある。さらに先の『幻中草抄』や『滝口物語（恋塚物語）』といった物語草子も含まれており、注目すべきものがある。近衛



家という貴族圏における、宗教的言説の享受の様相を考える上で、また、ジャンルとしての仮名法語やお伽草子の重なり方を見る上でも、極めて有意義な書物群といえる。

しかも、十八種の中には、女性に向けた言説が顕著な法語もいくつか認められる上、所有者に三時知恩寺の尼が推定される書物もある点などから、近衛家の子女が入寺した比丘尼御所での形成・享受の可能性が浮上してきたのである<sup>\*2</sup>。宗派の偏りなく、道歌や故事を多用した書物を多く含む、仮名主体の「道書類」もまた、比丘尼御所での形成・享受を想定させるだけの要素をはらんでいるのである。

このように、当時の比丘尼御所の関与を示唆する書物が他寺院や文庫などに移管されている例も少なくなく、また比丘尼御所に類した尼寺での文芸活動の例<sup>\*3</sup>も見られることなどから、調査対象の拡大が必要不可欠である。それによって、従来の尼をめぐる文芸研究を、新しい視点から具体的に発展させるだけでなく、平安時代の女房文化にも匹敵する、室町期の女性の文化的営為が明らかになると考える。

これからも、混沌たる中世に誘い、新たな展開へと導いてくれる、そんな心躍る書物との出会いを重ねていきたい。

\*1 拙稿「室町期の往生伝と草子—真盛上人伝聞連新出資料をめぐる—」（『唱導文学研究』六、三弥井書店、2008年）、『陽明文庫蔵「道書類」の紹介（一）』（『三田国文』45、2007年9月）

\*2 拙稿「比丘尼御所文化とお伽草子—『恋塚物語』をめぐる—」（『お伽草子 百花繚乱』笠間書院、2008年）

\*3 近世の上京で貴族圏と密接な交流のあった西方尼寺には、尼僧の関与が明確な絵巻が伝来する。拙稿「尼寺と絵巻—真盛上人伝の類型—」（『説話文学研究』43号、2008年7月）



国文学研究資料館 特別展示

## 「物語の生成と受容」の開催

11/9(月)～11/23(月・祝) 国文学研究資料館展示室

江戸 英雄 (文学形成研究系 助教)

当館の展示室で、11月9日(月)より23日(祝)まで開催する「物語の生成と受容」は、「平安文学における場面生成研究」プロジェクトが実験的に企画実施する特別展示です。

本研究プロジェクトは、主に30代の新進の研究者が集い、物語の生成と受容に関わる諸問題を、5年間に亘って多角的に検討してきました。平成17年12月1日の第1回研究会より共同討議を開始し、物語の「生成」(うつは物語)に関する報告が最初に討議の対象となり、以後、散逸(源氏桜人)、改作(住吉物語、夜の寝覚)、偽作(松浦宮物語)、引用(狭衣物語)、劇化(狭衣)、絵画化(源氏物語)、続編(山路の露、手枕)、成立論(源氏物語)、散逸物語の復元あるいは編纂(風葉和歌集)、史実(栄花物語)、場面(うつは物語)、擬古・注釈(若草物語)、物語取り(正徹・源氏)、本文(源氏物語)、物語音読論などといった観点を絡めて、研究会を全12回実施し、議論を重ねています。研究会で行われた基調報告と討議は、各年度の研究成果報告書『物語の生成と受容』①～④(国文学研究資料館)に公表してあり、本年度末には『物語の生成と受容』⑤(2010.2)を刊行する予定です。



当展示では、平安時代に誕生した物語文学を主たる対象に、物語はどのように作られてきたのかという生成の問題と、物語はどのように受け継がれてきたのかという受容の問題とを、二つながらに研究し

た本研究プロジェクトの研究成果に関わって、平安時代以降の物語文学及びその関連資料を体系的に展示します。主たる展示予定資料は、研究会の際に供覧に付してきた、共同討議の関連資料、及び本館の新収資料です。研究会の際に供覧した資料については各年度の研究成果報告書に明記し、特に『物語の生成と受容』④よりは、研究会の際に行った資料の解説を「展示資料検討報告」(森田直美)として掲載しました。また、『源氏物語歌寄せ』は、第6回研究会(H19.6.29)の際に供覧した資料ですが、幸いに時宜を得たので、本プロジェクトメンバーによる翻刻と解題(阿尾あすか)を、『物語の生成と受容』④の別冊附録としました。

ここで

は、展示に当たって考えてみた、多岐に亘る



これまでの議論のパースペクティブの一つを提示するとともに、出品予定の物語関連資料を挙げておくことにします。なお、この記事は第10回研究会(H21.7.25)での報告「プロジェクト展示「物語の生成と受容」について」(報告者:江戸英雄)をもとにしています。

※ ※ ※

さて、物語の生成と受容という観点を明らかに打ち出すために、便宜的に、物語を次の四種類に整理してみました。最初にその試案を提示しておきます。

- 1) 錯簡や脱文など、諸本に共通する欠陥があることにより、一つの〈祖本〉からいくつもの写本や刊本が作られていったことが分かっている物語。うつは物語、浜松中納言物語など。
- 2) 物語の内容から見て、ある特定の時

代環境のもとでオリジナルを創作した一人(統括された一集団)の〈作者〉がいたことが明らかであるとともに、成立後、極めて個性的な伝承者の手を経て、内容の異なる個性的な数種の伝本が派生していったことが分かっている物語。住吉物語、夜の寝覚など。

- 3) 物語が成立し人々に受容されるようになった後に、その〈読者〉が作者となって新たに作った続編であることが分かっている物語。山路の露、手枕など。
- 4) 鎌倉時代物語あるいは中世王朝物語と呼ばれている物語の中に多い、〈天下の孤本〉といつてよい類の、上記の類別の対象とはならない物語。有明の別れ、恋路ゆかしき大将など。

以上の中、3の類については、資料の残存状況という基準に拠らないので、他の類とは異質な類別であるかとも思います。2の類では、「ただ今聞こえつる『今とりかへばや』などの、本にまざり侍るさまよ。何事も物真似びは、必ず本には劣るわざなるを、これはいと憎からずをかしこそあれ」(無名草子)といった議論も起こります。3の類でも本作との関係は問題になり得ますが、ここでは別に類を立ててみました。

これらの四種類の中、1より3までの類については、これまでの共同討議の中で問題となり、例えば、2の類に見られる作り方について、1の類にも当てはめることができるか、というような話題(物語の生成と受容①)もありました。個人的には、これらを混同しない議論は生産的ではないか、と思っていますが、資料の総量が多い物語になればなるほど、問題は多様に絡まってくるでしょう。

当展示では、この四種類の整理を基礎に置き、『生成』と『受容』の2つのパートを構成して、物語関連資料を展示します。

※ ※ ※

では次に、『生成』のパートに展示する資料を挙げ、その中より数点を取り上げてみます。



## 《生成》\*\*\*\*\*

1. 河内本源氏物語・薄雲の巻 大四半切(実践女子大学蔵・個人蔵・当館蔵)
2. 伝飛鳥井雅親筆伊勢物語(長谷章久氏旧蔵)
3. 桃園文庫旧蔵大和物語(同上)
4. 生川春明書入うつつは物語(新収)
5. 浜松中納言物語
6. 我が身にたどる姫君(金子武雄氏旧蔵)
7. 恋路ゆかしき大将(同上)
8. とりかへばや(初雁文庫)
9. 源氏物語(正徹本)
10. 山路の露(初雁文庫)
11. 源氏雲隠抄(同上)
12. 手枕(同上)
13. 夜寝覚物語(金子武雄氏旧蔵)
14. 奈良絵本住吉物語(当館貴重書)
15. 奈良絵本狭衣の草子(当館貴重書)

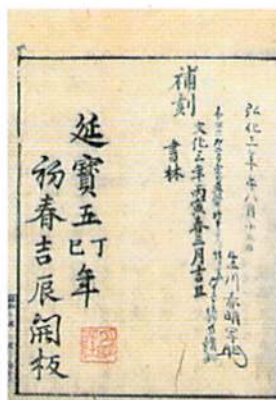
最初に河内本源氏物語薄雲の巻の古筆切よりご覧いただけますが、これは「国文研ニュース」第14号(2009.2)の「『源氏物語 千年のかがやき』展の片隅に」(横井孝)の中で存在が知らされていた資料群です。藤原為家筆と伝わる古筆を含む、鎌倉時代中期の断簡は、繋ぎ合わせると、「薄雲の巻の相当な本文を再現できることになる」(実践女子大学文芸資料研究所編『実践女子大学所蔵 源氏物語関係古典籍図録I』2009.5発行)ものです。尾州家の〈修正〉〈改訂〉の手が加わった河内本とは異なる「河内本」の本文が、大きなウォールケースの中に出現します。

次に、「国文学研究資料館ニュース」第3号(2006春)で、寄贈があったと知らせてありました故長谷章久博士のコレクションの中の優品を、今回初めて展示します。

伝飛鳥井雅親筆伊勢物語は、定家校訂本系の中、若狭の武田家に伝わった本(武田本)の奥書を有する写本で、伝承筆者の飛鳥井雅親(1417～1490)は、勅撰集の撰進も依頼されていた、室町中期の歌人です。なお、武田本についてですが、本館の「調査研究報告」

第24号所載の伊勢物語奥書集成に見える河野信一記念文化館所蔵本(伊勢134)に拠りますと、後土御門院(1442～1500)の御物が後奈良院の御代(1526～57)に、能登の畠山修理大夫入道福胤(1491～1545)に、三条西公条(1487～1563)と万里小路秀房(1492～1563)を介して伝わり、その後、応仁の乱の時に紛失したが、越前の朝倉入道宗順(1483～1563)が求め出でて、若狭の武田伊豆入道紹真(1514～)に伝わったということです。

生川春明の書き入れを有するうつつは物語は、天保15年(1844)の刊記を有する、いわゆる文化3年補刻本で、天保3年(1832)に本居宣長の書入を写した小西春重本を、弘化3年(1846)に生川春明が写し、更に嘉永6年(1853)に佐野方脩が田中道麻呂や鈴木胤の注を栗田直政の本より青墨で



書き加えた、という本です。反町茂雄の「月明荘」の印がありますが、『弘文荘待賈古書目』第4号には「古物語中本文の錯雑最も甚だしき宇津保の系統を按ふる上に於て有益なるもの」であると紹介されていました。現在は、内侍のかみと国譲中とに見える錯簡などによって、一つの〈祖本〉を起点に置き、前田育徳会尊経閣文庫蔵十三行本を最善本と認めて諸本を整理していますが、板本を中心に読まれていた時代、学者たちは、このように先達の校本を求め、写し考え、独自のうつつは物語を作成して備えていました。

恋路ゆかしき大将は、九条家旧蔵の〈天下の孤本〉で、巻一より巻四までの零本。巻五は宮内庁書陵部が所蔵しています。万治4年(1661)の大火で焼失した書目

を記す大東急記念文庫の『禁裏御蔵書目録』に「恋路ゆかしき大将四冊」とあり、これは幸いにも書写されていたことによって散逸を免れたものであると思われます。当展示では、同筆と目される我が身にたどる姫君ととりかへばやといっしょにご覧いただきます。

『物語の生成と受容』②で話題となった源氏物語の〈続編〉、山路の露と手枕は、言ってみればx軸の生成とy軸の受容とで作られる面の中間的な位置に来る物語であり、どちらに含めるかは一考の余地があるように思います。ここでは補助的に、ある種の関数式として、寺田透が『井伏鱒二論』の中で、「多分、批評家は、創作をしない作家たるほかないのであろう」と醒めてみせていたことを考慮に入れてみます。批評家がこんなふうにも書けたであろうと言って書き出したら、批評が始まらないというのですが、そういう極端な見方を導入して生成と受容をすっきりと分かちますと、物語が書き継がなかったことへ想像力を膨らませた中世の二つの物語よりも、物語の省筆部分を物語の内容に適うように埋めてみせた近世の手枕のほうが、抑制があり、ややy軸寄りの位置にあると言えるでしょうか。山路の露は、山本春正編の源氏物語(万治3年刊)に源氏供養表白等と付された本を展示します。

近代以前は、作り手と受け手との境界が相対的にゆるやかで、中には、奈良絵本の狭衣の草子のように、浮舟的なヒロイン飛鳥井の女君を中心にして、本作にはなかった人物設定や大胆な場面設定が見えるものも作られました。



では、引き続き、『受容』のパートに展示する資料を挙げ、数点取り上げてみます。



## 《受容》 .....

16. 宝物集
17. 今鏡
18. 花鳥風月
19. 源氏物語画帖
20. 一滴集 (初雁文庫)
21. 源氏物語わかくさ (同上)
22. 詠源氏物語和歌 (石野)
23. 源氏物語歌寄せ
24. 源氏小鏡 (当館貴重書)
25. 源氏大鏡 (当館貴重書)
26. 伊勢物語朱雀院髓脳 (長谷章久氏旧蔵)
27. 竹取物語抄 (初雁文庫)
28. 落窪物語註釈 (同上)
29. 清水浜臣書入住吉物語 (同上)
30. 仙源抄 (同上)
31. 源氏装束文化考 (同上)
32. 物語書目備考 (金子武雄氏旧蔵)

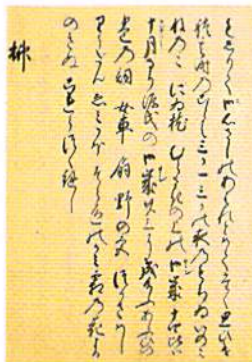
後半は、源氏供養に関わる記事を含む今鏡と宝物集よりご覧いただきます。実は妙音観音の化身であったとして罪を浄化する、というよりは物語の全面肯定に転ずる今鏡と、源氏供養を肯定する宝物集とは関心の拠り所がそもそも異なりますが、特に宝物集では、本によって物語の引用箇所相異がありますので、関心の軽重が明らかになります。

花鳥風月は、同じく謡曲に関わりのある御伽草子で、これは室町時代の古注類を基盤として、物語を受容する場を物語にしまったという物語です。花鳥と風月という姉妹が、扇に書かれた物語絵の人物が誰なのかを明らかにするために、業平、次に光源氏を降霊しますが、業平や光源氏本人より聞いた話、例えば五条の后と初めて逢ったのは二十二の時だったなどという「実話」を、一座の人々に告知らせていきます。



次は、詞はありませんが、源氏絵を十一枚貼り込んだ画帖です。ここでは、賢木 (左) と葵 (右) の図版を掲載しておきますが、基盤の上に紫の上を立たせて光源氏が髪削ぎを行う右の場面は、昨年度の「源氏物語 千年のかがやき」展に出陳した当館の源氏物語团扇画帖にも同様の絵が含まれていました。一方、光源氏が差し入れた櫛の文枝を六条御息所が見る場面は、源氏物語团扇画帖の光源氏が櫛の文枝を差し入れている場面よりも時間的には後の場面を描いたものでしょう。土佐光起筆源氏物語画帖や静嘉堂文庫の源氏絵詞に近似する構図の絵が見えますが、後者の絵詞には、「龍眼木 さか木をいさかおりても給へりけるを、さしいて、かはらぬ色をしるべにてこそいさきをもこえ侍にけれ、さも心うく、ときこえ給へば、神がきはしるしの秋もなきものをいかにまがへておれる櫛ぞ」とあります。

さて、伊勢物語、源氏物語、狭衣物語などは歌詠みの必須の教養であるとされ、物語を題材にとった歌は、数多く作られました。和歌に関連する物語の資料は非常に多くありますが、当展示では、近世後期の大名家が広汎に源氏物語を受容していたことを窺わせる詠源氏物語和歌、主に中世から近世にかけて詠まれた源氏物語を題材とする歌の集成である源氏物語歌寄せなどをご覧いただきます。源氏物語歌寄せでは、物語の本文を引用するなどして原材料を示し、その後に和歌の実例を付しているのが、物語のどこから和歌を作ったのかが比較的好く分かるようになっていますが、演劇や和歌といった、物語より二次的な生産物を作る時に参照されたのは、物語の全体ではなく、その実用に耐え得るように作られた梗概書であることがしばしば



ばでした。源氏小鏡は、代表的な中世の源氏物語の梗概書で、写本、版本が多く存し、歌人や連歌師などに広く利用されていたと思われます。

伊勢物語朱雀院髓脳は、物語の中の字句について、関連する故事を挙げて考証する類の注釈書ですが、物語から逸脱しているところがまま見られます。例えば、「百年に一年足らぬつくも髪我を恋ふらし面影に見ゆ」の歌の「つくも髪」については、老女の髪を海藻に見なした謂い、あるいは、九十九で百に一つ足りないということから白、つまり白髪というのでもありません。これは「つくも神」で、狐や狸が百歳になると鬼神となり、夜歩きをし、人に逢おうと恋しがって人に祟るものだとし、祟り始めの歌だという注が見えます。

このように、汪溢した受容する力は、物語を新たに再生創成していくこともありましたが、出版の時代となり、読者層が広がると、子々孫々のために、物語にわかりやすく注解を施して出版したり、あるいは刊本に注解を書き入れて往古を知る便りとしたり、という営みに発揮されるようになり、引いては、検索の便に備えた書、一つの専門領域に特化した注釈書も作られ、また、物語を広汎に求める関心が深められて物語書目備考のような目録も編まれるようになりました。

※ ※ ※

以上、当館の11月の展示「物語の生成と受容」につき、簡単に紹介しました。当展示で、豊潤な物語の魅力を感じ、奥深く広がるその世界の一端なりをご堪能いただけますと幸いです。

当プロジェクトメンバー一同、皆様のご来場を心よりお待ちしております。

..... プロジェクトメンバー .....

中村康夫 (代表) 伊藤鉄也 江戸英雄  
阿尾あすか (機関研究員) 吉田小百合 (RA) (以上館内) 岩城賢太郎  
小川陽子 加藤昌嘉 金光桂子 高橋由記  
中川照将 萩野敦子 松岡智之 横井孝  
横溝博 (以上館外) 安藤徹 (本年度客員)  
森田直美 (前 RA, 機関研究員)



## 子ども見学デーの報告

小学生を対象とした「子ども見学デー」を8月4日（火）に開催しました。

国文学研究資料館の「子ども見学デー」は、平成16年度から実施している行事で、今回が6回目となります。昨年に引き続き、立川市立第十小学校のサマースクールの一環として小学生13名と引率の校長先生および保護者3名、また近隣の小学校からも小学生12名と保護者11名、合計40名が参加しました。昨年の参加者数の2倍に増え、終始盛況のうちに終えることができました。

当日のプログラムは、まず今西祐一郎館長の挨拶があった後、当館がどのような研究や事業をしているかを見てもらうための館内見学、休憩を挟み、入口敦志助教による「百人一首の話」、続いてカルタ取り大会、表彰式というものです。

館内見学では、研究室、閲覧室、守衛室および展示室などを見て回り、子ども達は研究室や閲覧室で本の量の多さに驚き、展示室では、折しも展示中の「百鬼夜行の世界」を見学しました。

「百人一首の話」では、百人一首の成り立ちの説明、色々な種類のカルタの紹介があり、古典作品を読み継ぎ日本の伝統文化を継承していくことの大切さを学びました。その後のカルタ取り大会では、当館外から3名の講師（青柳隆志先生・内池三郎先生・兼榮信行先生）をお招きし、狩衣姿で、宮中歌会始めと同じ読み方で百人一首の和歌を披露してもらいました。子ども達は真剣なまなざしで、熱心に取り組んでいました。「負けたけど楽しかった」「もっとカルタ取りがしたかった」「来年も参加したいです」など嬉しい感想も寄せられました。

（青田寿美）



## 資料紹介 日本文学翻訳コレクション

今や日本文学は国際的な広がりを見せ、世界文学の中の日本文学となっている。平成20年の源氏物語千年紀に関するイベントを通して、『源氏物語』が世界中で24種類もの言語に翻訳されていることがわかり、大きな驚きを覚えた方が多かったはずである。三島由紀夫や村上春樹の作品も、さまざまな言語で翻訳されている。

福田秀一氏（当館名誉教授、平成18年4月ご逝去）より、平成14年以降18年4月までの間に、上代から現代に至る日本文学に関する翻訳書・研究書約1,000冊の寄贈を受けた。30カ国20言語からなる、古典文学を中心とした貴重なコレクションである。海外で出版された書籍という事情から、入手不可能な本も多い。本コレクションの活用によって、文学・言語・文化・歴史はもとより、そこに留まらない新たな研究分野が育っていくことが期待される。

このコレクションの一部については、『日本文学研究ジャーナル』（第2号・第3号、平成20年・平成21年、科研費研究報告書）の『翻訳事典（古代～中世）』の項目に解説がある。

（伊藤鉄也）





## 平成 22 年度アーカイブズカレッジの開催

当館では、多様な史資料を取扱う専門の人材を養成するための研修会を行っています。研修会は、長期コース・短期コースの2つのコースを、それぞれ年1回開催しています。

平成22年度の予定は以下のとおりです。

受講者募集等については、今後、お知らせいたします。

### ○長期コース

開催場所：人間文化研究機構国文学研究資料館 2階オリエンテーション室

日 程：前期 平成 22 年 7 月 20 日（火）～8 月 13 日（金）

後期 平成 22 年 8 月 30 日（月）～9 月 24 日（金）

### ○短期コース

開催場所：名古屋大学

日 程：平成 22 年 11 月 8 日（月）～11 月 19 日（金）

※前後期・短期とも最終 1 週間はレポート作成に充てる。

## 平成 21 年度古典籍講習会

当館では、日本古典籍の整理・目録化を促進し、広く活用されるよう環境の整備を図るために、各所蔵機関の図書館員等を対象として、書誌学の専門知識や整理方法の技術修得を目的とする講習会を国立国会図書館との共同主催により、以下のとおり開催します。

ご応募お待ちしております。

○期 間 平成 22 年 1 月 20 日（水）～22 日（金）（計 3 日間）

○申し込み方法 当館ホームページ（<http://www.nijl.ac.jp>）に掲載している申込書に必要事項を記載のうえ、当館企画広報係まで郵送してください。締め切りは、平成 21 年 10 月 30 日（金）（当日消印有効）。FAX、電子メールでの申し込みは受け付けません。  
※その他、詳細は当館ホームページをご覧ください。

## 第 33 回国際日本文学研究集会

前号に掲載したとおり、第 33 回国際日本文学研究集会を平成 21 年 11 月 28 日（土）～29 日（日）の二日間にわたり、当館大会議室で開催することとなりました。

今回のテーマは「語れる人称・なぞらえる視点」です。研究発表が 14 名、ポスターセッションが 3 名を予定し、日程の最後にイフォスミッツ先生（ライデン大学教授）から「近世日本のヨーロッパ譬喩画（エムブレム）受容：文と絵の関わり」と題した講演が行われる予定です。詳細な日程につきましては、当館ホームページをご覧ください。（<http://www.nijl.ac.jp>）

ご参加の程、お待ちしております。





## 国文学研究資料館の大学院

専攻長 中村康夫

国文学研究資料館は専門の研究資料センターとして多くの方に利用いただいておりますが、大学院博士課程も持ち、教育活動も活発です。

20名ほどの教員スタッフはいずれも優れた業績を誇る人材ばかりですし、個々に展開される授業は多くの方が覗いてみたいと思われるのではないのでしょうか。

総合研究大学院大学日本文学研究専攻と称している博士課程は、そうした基本教育機能の充実はもちろんのこと、その枠を少しでも広げてより優秀な人材を育てていこうと特別講義というものも開いています。

特別講義は日常の授業では触れられない角度からテーマを設定して、専攻内外の研究者をお呼びして講義していただき、その講義録を後日それぞれ1冊の形にして多くの方にその豊かな内容を知っていただくとともに、日本文学研究専攻の立派な活動も知っていただこうとしています。

今年の第1回特別講義は、7月21日に成城大学文芸学部教授宮崎修多先生には「江戸漢詩史再考—格調詩に盛り込めるもの—」という題で、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫准教授佐々木孝浩先生には「私説・書誌学のすすめ」という題で講義をしていただきました。

前者の、人間は考えることをどこまでどう表現するかという文学表現の深淵は、深い含蓄を含んで聞く人の記憶に残りましたし、後者の、昔は見られなかったものが見られるようになっている現代という時代の持つ可能性を押さえた動的で活き活きとした指摘は、研究する者を刺激してやまない好論と思いました。

特別講義は、基本的にどなたでも聴講できます。ご希望の方は、資料の用意がございますので、教育支援係までお電話でもいただければありがたく存じます。開催日時などもそのときにご確認ください。



佐々木孝浩先生



宮崎修多先生

## 表紙絵紹介

## 住吉物語〈すみよしものがたり〉

国文学研究資料館蔵 貴重書 請求記号 99-39-1~3

平安時代中期成立の代表的な継子譚の物語。物語内容は、父中納言の邸宅で継母と二人の義妹と暮らしていた女君が、継母の奸計に苦しめられてついに住吉の浜に脱出、そこで男君と奇跡的に邂逅して上京、最後には幸せな生活をつかんだ、という一種のシンデレラストoryであるが、たいへん多くの異本がある。表紙絵の当館本は江戸時代前期写の奈良絵本であるが、場面の有無等について、いくつかの他本との相異点が見られる。比較的近い慶長古活字十行本と対照してみると、上京する場面の本文に相異点があり、当館本では、女君が琴を弾きながら「ことのねをたつねてかよへ住よしのきのひめまつ我も恋しき」と思ったという本文がない。

住吉物語  
(国文学研究資料館蔵)

(江戸英雄)



## ● 企画展示「能楽資料展」の開催

前号のニュースでお知らせしましたように、表章氏（法政大学名誉教授）による連続講演「表氏八十以後能楽談儀—能楽研究百年史の争点を洗う—」を、本年10月26日、11月9日、11月30日、12月7日、12月21日（いずれも月曜日）の日程で実施します。それに合わせて、当館所蔵・当館寄託・個人所蔵の、能楽に関する文献・絵画などのさまざまな資料の展観を行います。講演当日の12月7日と12月21日には、金春禅竹自筆伝書を初めとする館蔵貴重書も展示いたします。初公開品も多数ありますので、関心のある方々の御来場をお待ちいたします。（入場無料）

### 〔主な展示予定資料〕

謡本：観世元盛節付謡本・金春喜勝節付五番綴謡本ほか

能楽伝書：『至花道』・『曲付次第』・『笛彦兵衛伝書』ほか

能楽関係の歴史史料：『春日御遷座御帰座日記』・『重修猿楽伝記』ほか

能楽を題材にした絵画：絵入り本『楊貴妃』・中島華鳳筆『能楽写生帖』ほか

狂言および間狂言の資料：江戸初期写和泉流『間』ほか

（以上、会期中展示）

金春禅竹自筆『五音之次第』・同『五音三曲集』・同『六輪一露之記』・鳥養宗晰節付謡本『忠教』・洲田玄少節付謡本・『法華五部九卷書』ほか

（以上、12月7日・12月21日のみ展示）

会期＝12月7日（月）～12月25日（金） ＊土・日・祝日は休み

時間＝10時00分～16時30分

会場＝国文学研究資料館1階展示室

## ● 閲覧室カレンダー 2009年11月～2010年1月

■青は休館日 ■黄色は土曜開館日

### 11月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

### 12月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

### 1月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24/31	25	26	27	28	29	30



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

**国文学研究資料館**

〒190-0014 東京都立川市緑町10-3

Tel.050-5533-2910 Fax.042-526-8604

発行日 平成21年10月23日

編集 国文学研究資料館広報出版室

印刷所 三鈴印刷株式会社

©人間文化研究機構国文学研究資料館